

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年
6月号

毎月23日発行
通巻430号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamoto.jp>



オニバス 矢追房子さん撮影(文・7頁)

昭和37年6月23日 月次祭法話より

天地自然に相通ずる心

法主 矢追 日聖(51歳)

天災の起こる原因

今年六月に入ってから非常に雨が多
うございますが、今日の月次祭は、幸い
にして丁度梅雨の晴れ間になって、誠に
結構でございます。

毎年夏から秋にかけては、大雨とか台
風とか、いろいろと災害の生じる時なん
ですが、それは今年も変わりはないさそ
うです。

特にここ数年来、日本を見ております
と、水も足りなくなるような照り方をし
てみたり、また集中豪雨で山が崩れてあ
ちらこちらの家屋が潰されるとか、鉄道
が破壊されるというような降り方をし
ています。

あるいはまた地震や津波、風によつて
多くの人がいろいろと被害を被つてお
ります。

こういうようなことは誰も望まないこ
とですけど、出来てくることだから仕
方がないとして、ただ人間同士が災害を
最小限度にくい止めようと努力してお
ります。けれどもこの自然に対して、現在
の人間の物質的な力、科学とかというも
のは、あまりにも小さ過ぎて、いくらや
っても勝つことは出来ないんです。

もちろん科学者は天災が来る場合、そ
の原因と結果というものを、我々にも納
得のいくように説明はしてくれていま
す。

例えば、日本の本土を侵すような大き
な台風の目が南方の洋上で発生したとす

ると、それから以後の経過は科学者が捉えるでしょう。

しかし何が原因でこの大きな台風の目がそこに生じたかということについては、科学ではちよつと割り切れないものがあるだろうと思うんです。そこで、この天災の起こる根本的な原因というものを探り下げて考える必要があるんです。

これは宗教めいたこと、あるいは迷信と思われるかも知れませんが、天災とは、自然の心、天が狂っているということなんです。そして、自然の心を狂わせているのは、我々人間の心が自然の心に沿っていないからなんです。

いつもお話し申し上げることですけれど、我々人間も大自然の中に生まれさせてもらい、自然の力により今こうして現存して来ている。そのため天災と人間の心とは、切り離すことの出来ない因果関係になっておるんです。

だから、天地自然の心に沿うような人間が社会の大部分を占めた場合には、このような天災というものは起こらないはずなんです。仮に、南方に於いて一つ台風の目が出来たとしても、その雨と風によつて夏の稲に付いておるいろんな害虫が洗われるようなことになるんです。

しかし、そのような社会は想像の世界だけであって、現実にはここ百年、千年経つてもおよそ縁の遠い話ですから、天災のような大自然から我々人間が受ける大いなる懲罰を、まだまだこれから毎年毎年繰り返して受けなければならぬとい私は思うんです。

信仰すれば災難は来ないのか

それならば、真面目に一つの信仰を持ち真面目に世渡りしている者が馬鹿を見ると結果にな

ると思うかもしれませんが、けれども、そこにはまた地獄の中にも極楽があつて、例えば、関東大震災のような場合、被服廠に於いて全部が死んだという中ででも一人二人生き残つておる。あるいは、電車が衝突して何百人が死んだというような時でも、奇跡的に助かつたという人もおるんです。

そのような人は、まあ平素の心がけが良いんだらうと私は思うんです。別にどこを信仰してその神様のご利益で助かつたという意味でなくて、その人自身の生活態度なり、心の持ち方というものが、天の神様の心に沿うておるんです。そうすると、自分が願わなくてもそのようなご加護というか、ご守護というものが期せずして顕れて来るんです。

世間にもそのような奇跡によつて助かつた人は、沢山あります。その中には、どこそこの観音さんのご利益だつたとか、あるいはまた不動さんのお守りを持つておつたから助けてもらったんだとか、信仰のお陰だとか言うて喜んでおる人がいますけれども、これはちよつと違うんです。

自分に持つて来られた災難というものは、仮にどれだけ信仰しておつても受けなければいけないものです。また自分が不注意であれば、お守りがあらうと無かろうと怪我するときには怪我するし、事故の起こるときには事故が起こるんです。

それに加えて、人間から見ても、「ああ、こいつは心構えが良くない奴や」とか「あいつの心意気は良くない」と思われるような場合は、天の神様の方から見れば尚更罪が深いわけです。

勿論、自分が信じる一つのものに全精魂を打ち込むような信仰には価値があるんですよ。ところが、観音さんを信仰している人、不動さん、また中にはお稲荷さん、巳さん、あるいはお大師さんを信仰しているような人に「信仰とはどういうこ

とであるか」と聞き糾^たせば、広く世間を見渡しても、まあ恐らくまともな答えをする人は少ないだらうと思うんです。

自分自身の能力の限界を知る

こちらにお参りになつて居る方はどうか知りませんが、欲の深い人だと言つて間違いないと思います。

その欲もいろいろあつて、例えば自分が幸福になりたいとか、人間的価値を高めたいという意味に於いての欲望なら、もうこれは最も良いんです。ところが、別に人には害を与えませんけれども、金を儲けたいという欲望による信仰があります。

その代表的なものは、一日とか十六日に生駒に参れば、うじようじよするほど居りますわね。聖天さんの煙を帽子の中に入れて頭に縛り付けて帰るような人、これはもう欲の塊りなんです。こんなものは信仰ではないんです。自分の欲望を神さんとか仏さんとか人間以外の力を借りて達しようという、言い換えれば最も卑怯な人間なんです。

そのようなことをやる前に、自分自身人間であるということに自覚しなきゃいけない、人間には人間としての価値があるんですから。仮に偉い神様なり仏様が居つたとして、力を貸してくれるにしても、自分自身にそれだけの能力が無ければ、願いは叶わないんですね。

例えば、野球選手が日本一のピッチャーになりたいと思つて、成田の不動さんに願掛けしたとしましょう。それでも、その人の体力なり気持ちなりに、そのような特技がない限り、決して叶うものではないんです。またそれだけの技能があつたとしても、それを磨き、やり通す精神力がなければ、それを發揮することは出来ない。

人間は一人一人、生まれ付きの素質とか能力というものを持っておるんですね。だから、それを持っておる人が一生懸命練習すれば、その能力が出て来て日本一のピッチャーになれるかも知れない。そういうような可能性や限界を、自分で知ることが一番大切なことなんです。

そのためには、絶えず休まずなまくらも起こさないで一生懸命に自分の思惑をやり通すんです。そうすると、自分の能力はもうこの範囲以上には無いということも自分で判るわけなんです。これは、自分を修めるという道でもあります。

願を掛けることによつて自分の欲望を達した人は世間にも沢山おられますけれど、それは神さん仏さんの力ではなくて、自分自身の力なんです。その人が願を掛けるということ、一つの心機一転をし、それに応じた努力をしたからこそ、目的が達成されたんです。それをその人は、神様からご利益をもらったお陰でこうなったんだというふうに言うんですね。

仮に一生懸命に願を掛け、一生懸命に拝んでその目的を達成させるだけの力が神様仏様にあるならば、世間で失敗する人も貧乏人もおらないはずだし、今のようにこんな千差万別とした苦勞をするような世の中にはなっていないはずなんです。

迷信を主体とした宗教を否定する

そこに、神様仏様というものを余りにも甘う見過ぎる人間の根性がある。ということ、今までの宗教というものが、余りにも嘘ばかりを教えたからだとということになるんですね。

例えば本来の仏教は、哲理をもつて教えておる宗教ですから、迷信というものが無いんです。殆ど自己完成の道ですね。自分が仏さんに近づくよ

うな人間になろうと、禪宗の坊さんでも一生懸命それをやっている。

ところが、そこから発展しておる現在の仏教といえ、今言うようにご利益というものを中心とした行き方が多いんです。

釈尊がお説きになったのは、祈願を掛けたり一生懸命に信仰すれば欲望が叶うというようなことではなく、人間の因果ということです。だから、自分の欲望、現世利益というものを対象としてなんぼ一生懸命に拝んでも、聞いてくれたら不思議で、聞かないのがほんまなんです。

ところが、例えばこの不動さんにはこういうご利益があるとかよく言うでしょ。ひどいものになると、石切の神さんです。あれは饒速日命で、元来、国土建設の神様です。であるのに、「でんぼ」(※できもの)の神様ですよ。あるいはまた三輪の明神さんでも、出雲朝廷を大和朝廷に返還した日本の古代に於ける偉大なる大立者である大物主命(＝大國主命)さんなのですが、それを捉えて已さんだとか言ってます。

日本人のこの神さんに対する考え方というのはもう滅茶苦茶なんです。お宮さんに参つても、一体何の神さんをお祭りしてあつて、その神さんはどういふ神さんだということを知る人が少ない。これもまた、日本人の持つておるややこしい宗教なんですね。

「でんぼ」が治るとか、疱瘡避けやとか言うて、神さんを何ぼ拝んだつてそんなものは絶対効かないんです。それを効くように教えてきた今日までのいわゆる宗教家、神主さんとか坊さんとか祈祷師とか拝み屋とかいふ人達が、余りにも人間の欲望にびつたりするような巧いことを言い並べて信者を増やしたということに尽きるんです。しかも、いまだに皆そう思っているんです。

だから大倭というものは、そのような過去の迷信を主体とした宗教を、もう徹底的に否定しなければいけない。その代わりに、真面目で本質的な宗教というものをどしどし伸ばしていかなければいけない。

ここに大倭の一つの宿命があるんです。

願い事を叶えてやろうと甘いことを言えば付いて来る者が多いけれども、この神さんをなんぼ信仰したつて、目の前に見える現実生活に於いての利益は無いんだというようなことを言えば、人は逃げて集まつて来ない。けれども、結果論から言つた場合、どちらが幸せなんでしょうか。

大倭で言つ神様とは

大倭では、どこまでも人間個人、自分というものをまず修養し、人間的価値を高めていく。それが、神様の道の行き方であるんです。

我々凡俗な人間はその理想として、絶対的に何一つ欠点のない全知全能の完成した大人格者を目に見えない世界に想像し、上に戴く。これを神様と称しているだけなんです。

このような目標が無ければ、我々人間が修養する相手も無ければ、向上する相手も無いということになつてしまいます。

この天地自然、大自然の靈魂、目に見えない一つの親様を「太加天腹大神」という名前にしてあるんです。

ただ「自然」と言つても同じことです。

例えば、我々人間の目、毛、あるいは手の皮、爪とか、それらが集まつた人体の構造一つにしても、こんな精巧なものを一体誰が創つたのかと言え、誰が創つたものでもなく、何億年という昔から自然に土から湧いて来たんです。

仮にこの手の指が十本あつても三本であつても不便だと思ふんです。五本だから良いんですね。また、先が減るから爪つめと言うんですが、減るところは伸びるように出来ている。良く使う手の平の皮はだんだん厚うなってくる。これが顔の皮と一緒にやたら難儀ですわ。あるいは口の中なんか年中唾でじゅくじゅくしとつても爛爛れない。ところが手なんか水の中に漬けていたら白く膨れ上がるんですね。

だから人間の皮だけとつてもその場所によつて千差万別な、これだけ精巧なものに出来ている。こうした偉大なるものを創り出す大自然大宇宙には、我々の頭で解釈できん靈妙不可思議な何かの力があるんです。この力は神様と言うしかないんですね。

そういう神様の心に沿つて行くという、神ながらの道というものを中心として、自己を磨いて修養するのが、大倭の宗教なんです。

誰もが神様に帰依している

この神様に我々は絶対帰依している。口でこそ帰依してはいないと言つたつて、帰依しているんですよ、みな。わしは無神論だとか言う人がおりますけれど、そんなことは問題ではないんです。

我々が空気を吸うて心臓も動いておる限り生きています。だから自然の力に逆らうんやつたら、呼吸を五分でも十分でも止めてみたらいいんです。もういつべんに死んでしましますから。また、夏になれば薄着するし冬になれば厚着する。これも自然の法則通り我々がやっておるんやから、天地自然の法則に、知ると知らざるとに拘わらず、我々は絶対服従し順応しているんです。

これこそ神様ですよ。この神様、つまり自然の

前には我々人間はどう言うたつて勝つことはできない。朝から晩まで小便しなかつたら膀胱はパンクして死んでしまう。あるいは、飯を食わなければ腹減つて目が回ってくる。とにかく小便したくなつたら小便しに行く、腹の空いたときには飯を食う、こういうような自然の法則通りに、我々個人の肉体を使わなければ自滅なんですね。

それと同じに、人間の心の状態も、やはり自然の心と相通するものがなければ、人間というものは幸福にはならない、不幸になるんです。

ただ拝んで、欲信心を百曼陀羅やつたつて、これは罪こそ作るけれども決して自分の幸福にはならない。そういうような因果な罪は、子とか孫とか曾孫とかいう自分の家代々の子孫にまで付いて回る。これはお釈迦さんもお説きになつておることです。

大いなる天地自然の心で

我々の目に見えている現象を捉えていつても、丁度冬から春になるとぬくうなつてくる。いろんな草木がみな生育するべき時には、梅雨の雨がだらんと掛かってくる。梅雨の雨の中には普通の雨と違つて肥やしが入つておるんですよ。例えば、うちの家の犬の鎖でも、冬の雨に掛かつても全然錆びませんけれども、梅雨の雨に掛かるといつべんに赤錆が出る。あるいは、梅雨の雨で着物を干すと黒い斑点が出る。この肥やしが植物を育てるんです。そして「田植え」が来て、稲が育つて夏になると、今度は土用の暑い照りが出て来てみな生育させていく。

だから、相手選ばずみな平等に、あちらも伸ばしこちらも伸ばし、万物一切のものを平等に生み育て繁栄させて、皆が幸せになるようにという大

いなる心が、天地自然の心なんです。

太陽の光は水の上でもあるいは土の上でも草の上でも、どこでも平等に照つておる。雨も同じで、「ここは嫌いや」「ここは好きや」というようなことは絶対やらないんです。

そういう自然の心と我々人間の心とを比較してみると、人間というものは余りにも自分だけがと自分の家族だけがとか言う。とにかく自分を中心に置いて、自分の利益になることであれば他人は迷惑でも構わないというように、人間は大自然の心と正対な気持ちになり易い。そんな心構えでおる人は、また天から制裁を受ける。これがいわゆる因果応報というものです。この法則は釈尊がお説きになつておるんです。

だから我々は、現在、相互扶助の精神で、自分も幸せになり他人も幸せにしようとか叫んでおります。だんだん物質文化が進歩してくるころした時であつて、自分だけがというようなことを言つておる時代じゃないんです。今はもう真面目な意味に於いての社会主義の時代なんです。そうした場合に、社会の人みんなが幸せになるようにという意味での一つの共同社会を目指して、一人一人が心構えを変えていかなきゃいけない。人間一人一人が社会人として伍していきけるような自覚というものを持たなければいけない。

こういうものは、いわゆる宗教的な信仰によつて得ることが一番結構だと思ひます。思想的あるいは政治的といった色彩ではないところから、要するに宗教から出た真の意味に於いての社会性を持つということ。言い換えれば宗教心を持つた人生を送ることが、社会全体の幸せになり、また自分個人の幸せになると思ふんです。

どうかそういうような大きな立場において、大倭の信仰を続けてほしいと願うんです。

大倭会文化行事報告 平成18年5月21日
第289回 亀岡・出雲大神宮へ
 林 修 三

お陽様を見る事の少なかつた本年の春、珍しく晴れ渡った、正に風薫る若葉の候、総勢三十七名（内子供四名）が参加して、京都府亀岡市千歳町の地にある丹波国の一の宮、出雲大神宮に詣でた。この地での文化行事は、昭和五十三年四月三十日の第八十四回文化行事に続いて二度目となる。参加者の中には、連続しての参加者も数名おられ、当時は懐かしんでおられた。

午前十一時頃、出雲大神宮の社頭に三々五々集まられ、先ず本殿（大國主尊 三穗津姫命をお祀り）にて自由参拝。続いて世話役の湯浅芳郎さんから本日の予定等の説明と、全員での記念撮影。観光ボランティアさんから出雲大神宮の由来等をお聞きした後、お借りした広間に案内された。昼食に入る前に、亀岡在住で今回の文化行事も何かとお世話下さった向井弓子さんと、私とで、亀岡に関わる話しを少々させていたいただいた。

昼食後、本殿上方に鎮座する上社（素盞鳴尊 奇稲田姫命をお祀り）、そして更に上方の磐座群のある神域（国常立命をお祀り）迄、参加者の殆どが十五分程の上り坂を登ってお参りをされた。

実は私はかつて亀岡の地に住みついたことがあり、その折、ほとんど訪れる人とならなかつたこの磐座群を何度となく訪れ、そこに憩い、はるか古代の人々へと想いを馳せた。この神域は、あらゆる喧騒から離れた山中での、空間や時間さえ超越した私の密やかな心癒される「場」であつたのだが……。

昨今は、いつの間にか、マスコミが持て囃すスビリチュアルなどと言われる名士の方々からの紹介

もあり、今や日本全国から多くの人々が集まり、各々の個人的な願いを叶えていた。たく「場」となつてしまつていた。何もなかつた磐座群の前には石燈籠が二基も据えられ、賽銭箱までもが置かれていた。わずかここ十数年の間の出来事の変化に、正に隔世の感を禁じ得なかつた。これらの事は、まつたこの個人的な感傷にすぎないのだが、私としては又一つ、大事な「場」を失つた事にやり切れない想いが残つた。

磐座群の内では、しばらくの間、誰一人として「願ひ事」をされる事もなく、楽しく「神遊び」を行つた後、又皆で坂道を下り、社殿に戻り散会となつた。帰路は各自思い思いのコースをたどられた。中には亀岡と嵐山を結ぶトロッコ列車に乗り、新緑の保津峡の景を楽しまれた方もあつたとお聞きした。

私自身は数名の方々と共に、案内役を勤め、亀岡の地と縁の深い出口王仁三郎師の足跡を求め、師の生家跡である「瑞泉苑」や、産土の杜である「小幡神社」（開化天皇 彦坐王 小俣王をお祀り）等を巡つた。かつて何度となく訪れたその地では、各々の場所に眠る霊人達との旧交を温める想いがあつた。たまさかにこの日の明け方、私の夢の内にあられた大本霊團の静謐な住宅地域の美しさに、想いを馳せながら……。

千早振る
 神世の往時
 偲ばるる

桑田の宮の
 御蔭神奈備



御蔭山と本殿 齋藤正宏さん 写

東光大祭と祖霊祭のご案内

日時 平成十八年八月八日（火曜日）

* 午後一時二十分より

東方の碑 拝礼所にて

* 午後二時より

大倭大本宮拜殿にて東光大祭

奥津齋庭にて祖霊祭が行われます

東光大祭とは 昭和二十一年旧七月十五日夕刻、現大本宮の東方の碑前あたりで法王様が農作業中瑞光が天にあらわれ、天の声「黎明は訪れたり東方の光 大法は立てり大倭太加天腹」が聞こえ、宗教活動の本宮が現在の大倭紫陽花邑であることを示されたのを記念する大祭です。

祖霊祭とは 大倭にご縁の皆さん方のご先祖万霊を始め、それぞれにご縁のある諸霊を鎮魂慰霊するお祭りです。

当日夕方六時ごろに東方の碑あたりで満月の出を待ちながら東方瑞祥について考えてみませんか。

今年も有志の方々により直会が用意されます。会費二千元。どなた様もお気軽にご参加ください。

尚、太陰暦では1年が354日となり、太陽暦の1年に比べて11日ほど短く、約3年に1回、余分な1か月を挿入して解消。この余分な月を閏月という。

今年、8月8日が「旧7月15日」で、9月7日が「旧閏7月15日」となります。

恒例 弥栄踊りは

平成十八年八月二十六日 土曜日
 午後七時半より

大倭あちろちろ (第14回) NPO法人むすびの家

代表 湯浅 進

大倭紫陽花邑の一角に、らい（ハンセン病）快復者の宿泊できる「交流の家」が竣工したのは一九六七年（昭和四十二年）。邑の家や施設は装いを一新し、当時の面影を見ることはできない。

唯一、「交流の家」だけが美観は見劣っているが、四十年前のまま堅固な姿で存在している。竣工の記念樹は二十メートル程の太木になった。

ここで「むすびの家」が大倭になぜ建っているのか触れておきたい。

「交流の家」建設の発端は一九六三年、当時同志社大学教授であった鶴見俊輔さんから「群馬県草津の国立らい療養所（栗生楽泉園）にいる知人の白系ロシア人トロチエフさん（アメリカに移住後、昨年死去）が東京に出て来るというので、YMCAで会った。彼はそこで宿泊の予約もしてあったのだが、その場になつて宿泊を拒絶された。彼は既にらいを完治しており無菌証明も持っていたんですよ」という話を聞いた鶴見ゼミの学生、ここで柴地則之さん（八九年死去）の登場。

当時フレンズ インターナショナル ワークキャンプ（略称FIWC）関西委員会の委員長だった柴地さんはその話を聞いて「トロチエフさんのようならい快復者の人が宿泊できる施設をワークキャンプの手で建設したらどうだろうか」とキャンプ仲間呼びかけた。

そして「どこに建てるか、土地はどうするか、資金は？」と難問が山積していた。

まず何よりも土地の確保が先決と考えた柴地は、最初山岸会に持つていこうと考えたが、そう

簡単に事が運ばないと思い直し、大倭紫陽花邑に相談してみることにした。

というのは前年秋、この大倭安宿苑でワークキャンプを行った際、紫陽花邑の創始者で大倭教の法主である矢追日聖と会い、言葉を交わした。

その時、温顔の法主が飄々乎として、「私はいと思ったことは、何でも自分ひとり決めてやる。これは、善意の独裁、や」といった。その言い方が面白く、柴地の印象に強く残っていたのである。

大倭本宮の月次祭に参加した柴地は、日聖法主に会い土地提供を願ひ出た。日聖法主は耕作中の田畑を使えばいい、と即座に快諾した。（木村聖哉『むすびの家物語』岩波書店より抜粋）

この土地提供によって、ワークキャンプは建設に向けて具体的な行動を起こした。それは建設資金の募金活動、らいに対する理解や差別 偏見に対する啓蒙活動、療養所との交流を図るためのキヤラバン隊の派遣などであった。

その一方で整地作業、基礎工事へと入っていった。しかし、六四年八月、周辺地元の人々が建設反対におしかけ工事の中止を迫った。法主さんは取り囲まれ「学生への土地提供を撤回せよ」と攻められていた。法主さんは「私にやめろといってもそれは出来ない。学生が要らないと言うならそれまでだが」と譲らない。その後奈良市長が「建設反対」を表明し、大きな社会問題となった。そのような中で、市議会有志議員がFIWCと地元の調停に乗り出した。結果、らい快復者の宿泊所ではなく社会復帰センターと名称変更し、「らい快復者を泊めない」という項目は削除してその調停案を受け入れ、既に建てた分を一旦壊し、新たな設計図に沿って建設を開始することになった。

この困難な問題に当たった時の委員長は白石芳弘さん（九六年死去）だった。その後、委員長は

図らずも私に回ってきた。そのため再開された建築関係や水道、電気などの申請は、私の名前で出された。後年完成後、むすびの家の管理人であった飯河（梨貴）のおばさん（九七年死去）から「湯浅さん、水道代と電気代がきてますよ」と声をかけられたものである。

二〇〇四年、「むすびの家」はNPO法人の認可をとった。これは「むすびの家建設に込められた志と活動の精神を刻むと共に、より良い社会に向けて新しい動きを作り出す」ことで、「むすびの家」の役割を社会的にもハッキリさせて行こうという考えから出たものだった。

役割としては大きく二つ。

その一つ目は、ハンセン病問題を中心とした差別 偏見との取り組み、そして患者 元患者の人達との交流。今年はいらい予防法が廃止されて十年、ハンセン病違憲国家賠償の熊本判決から五年。なぜこの様な強制隔離が行われ、非人道的差別が行われたのか、また当事者の人達は苦難の人生をどう生きてきたのか、繰り返し振り返ってみることが、様々な差別を防ぎ、助け合って行くことにつながって来るのではないかと。

二つ目は、FIWCの「ワークキャンプ」活動への支援、なかでも三十年来続いている韓国のハンセン病快復者定着村での活動、そして五年前から始まった中国の快復者村での合同ワークキャンプがあげられる。

国家の壁を越えたキャンパーの結びつきは、「交流の家」建設当初語られた「らいはアジアを結ぶ」夢が現れてきたように見える。

「交流の家」は、ハンセン病問題やワークキャンプ活動の資料 図書の閲覧、宿泊や会合にも利用できますので一度お立ち寄りください。皆様のご支援をお願いします。

逍遙遊を求めて…… 暮らしの中での巻

李 章 根

逍遙遊とは、何ものにも束縛されることのない
絶対に自由な人間の生活という意味（莊子より）

大倭の朝は気持ちがいい。落ち葉を掃いていると黄色い葉っぱの下にカタツムリがひっそりと眠っていた。やんちゃなヒヨドリが拝殿の窓をこつき、鶯やホトトギスの鳴き声が遠くでしている。

七月がくれば大倭に来て丸三年になる。仕事も（鍼灸院開業）新しい土地でやっていけるのかという不安もあったし、一年はいろんな意味で心身共にしんどかった。お蔭ではじめて円形脱毛症になつて見事にふたつも禿げができていたのを知ったのは散髪屋に行つた時の事で、新鮮だった。

大倭に来る時に、「何かを知っているつもりや、分かつたつもりにだけはならないように。自分のイメージや知っているものの中に大倭での体験を取り込んでいくのではなく、未知の大倭に自分を開いていこう」と心に決めていた。やはり僕にとっては『おおやまと』を読んでいるのと現地での暮らしは違つていた。まず紫陽花邑は生活の場であるという事。神戸や東京で法主さんの言葉を読んでいた時は、生活するという感覚が希薄だったせいか、宗教というもののへの認識がどこか宙に浮いた観念的なものだったのだと思う。

一口に生活といつてもいろんなスタイルがある。今までの僕の生活は自然と人間を結びつける軸のないものだったが、大倭では、月々の祭典や季節の行事があるお蔭で、形として生活の中でのリズムや季節の感覚、それに気持ちの立ち戻れる機会を与えてもらっている。今後はこの中で僕個人の生活スタイルをどう創っていくかだと思つた。

まあこんなんびりした事を言つておられるのも、一人者であるという事と自営業だからだと思つた。

紫陽花邑の形態を外から見れば、半分は社会のルールや常識との折り合いの中で成り立っていると思うが、後半分は今の常識の枠には収まらないわけの分からぬ霊界というものがあるようだ。大倭の本質に迫る事は、場所としての大倭に来た来ないという事とは異なる次元の問題である。

最近よく思うのは、人間は凝り固まり安心安定したいという思いの中で、いつしか目の前のものを、「今」から離れて過去に見ていた残像や自分の思いの投影として見ているのではないかという事。そんな時、その反対の動きとして安心安定という幻想を揺さぶり、溜まった垢を削ごうとする動きが出てくる。禿とはこの反復運動の中で自分の器を発見し自分を知る事なのかもしれない。

阿呆になるとは大変な事のようにだ。「これが自分だ」と思つてしまった時から苦が生まれてくる。この反復運動を通じて少しでも真実を見出し、けるのか、揺さぶりの中で自分に埋没してしまうのか、死ぬまで続くんだろうなと思つた。その中に戯れ遊ぶ心境になればいいなあ。逍遙遊、神ながら。

こぼれずみ

埼玉県比企郡 小林 千賀子

いよいよ梅雨に入りました。中国では、「雨の日は、友達を連れてくる」というそうです。雨の日に手紙が届くと、いつもこの言葉を教えてくれた恩師を思い出します。中国で学生時代を過ごし、戦争が始まり、昨日までの友人を敵として、戦わねばならなかった心中と、平和の大切さを語り続けた師でした。静かに、友人のことを思つて、手紙

表紙写真について オニバス 矢追 房子

大きなトゲのある葉を持つオニバスは、一年草で絶滅危惧植物である。

押し葉にしたのを触らせてもらった事がありましたが、鋭いトゲが一面に出ていて突くと痛そうだった。二〇年前頃はめずらしいものではなかった様である。種子は必ずしも翌春に発芽するとも限らず、休眠期間も一定していない様です。

オニバスの種子はかなり長期休眠が可能な様で、五〇年前後の発生消失期間の後に復活した例も知られているとのこと、水のきれいな湖沼よりも平野部の栄養豊かな「ため池」によく育つ、どこの地でも生育するわけでもない様である。とてもデリケートな植物である。

オニバスの大きなものの葉の上に乗れるものかどうか、研究者の中には考えている人が居られるらしい。私も乗つてみたい気もしますが、沈むと困るのでやめておこう……。

花は名に反し濃い紫の美しいものである。そばに赤や緑の葉を見せて、菱が可憐に浮かんでいて去りたい思いと共になつかしい風景でもありました。見に連れて行つて下さった方に感謝いたします。

田舎にいた頃、あまり大降りでない雨の中で、田の草取りなどをするのは、割に好きでした。かえるも嬉しそうに鳴いていました。やわらかな雨は、すべての生き物を養ってくれるような気がします。私たちの心も。
水がなくて苦しんでいる人々の地に、この雨が少し届いてくれると良いのですが……。

あじさい日誌

5月11日 「看護の日」、大倭病院では「健康チェック」を、雨のために玄関ロビーにおいて行いました。骨密度測定 血圧測定 体脂肪測定など毎年待っている方も多いイベントです。

5月13日・6月10日 囲碁の拾石の会、やっています！

5月14日 祝会。

5月15日 大倭神宮月次祭。

5月20日 夜、交流の家でF I W C定例委員会がありました。

5月21日 大倭会文化行事。5頁に報告記事があります。

紫陽花邑では、桜の木を中心に害虫駆除のため薬剤散布が行われました。

5月23日 大倭大本宮月次祭。この日拝殿でご希望の皆さんへということで、法主さん、鈴木かあさんの形見の和服を頂きました。

近頃の紫陽花邑には、鶯やほととぎす、食用蛙に加え、機嫌が良いにつけ悪いにつけ昇ちゃんの声がよく響いています。

5月24日 午後、大倭病院と大倭大本宮一般会計の決算会議が行われました。

6月3日 東京八王子市の春日作太郎さん来邑(11日まで)。

6月4日 薄曇りで風も爽やかなこの日、子供達 初体験者も含め、大勢が田植えに参加しました。写真は、順調にお昼頃には最後の列を植え終わって、腰を上げたところ。恒例の宴会の後も水路を離れない子供を見守りながら語らいが続きました。

6月6日 大倭神宮月次祭。夜、邑倭の会。

お礼とご報告

法主様の奥津城完成にともない、車椅子でもまじかまで行ってもらえるような道の完成が待たれておりました。

このたび車椅子のまま拝殿左側のエレベーターを使い奥津城にいける道が完成いたしましたのでお知らせいたします。

皆様方のご厚志のお蔭によりましてこのように奥津城工事が完成のはこびとなりました。本当に有難うございました。

平成十八年六月吉日

宗教法人 大倭大本宮
代表役員 矢 追 家麻呂

田んぼ通信

草取りのご案内

今年も草取りに皆さんのお力をお借りしたいと思います。よろしくご助力下さい。

7月2日(日)
午前9:00~(雨天決行)
(大雨は1週間後)

- *午前中を予定しています。
- *泥で汚れてもいい服装で。(着替え、タオル各自で準備)
- *軍足・飲み物は用意します。

連絡先 TEL 0742-41-4615 (玄徳院)

第30回 大倭安宿苑夏まつり

氷

7月29日(土) 午後3時~
あすか駐車場にて
お問合せ: 安宿苑事務局
TEL 0742-48-3221

不用品/バザーも行いますので、いつもながらご寄贈のほどよろしくお願ひします。



なるのでしよう。
大倭安宿苑では
6月4日 長曽根寮あじさい広場
第28回卓球大会。優勝は(男子) 須加宮 木村主任生活指導員、(女子) 長曽根 喜多介護士、コログアシ卓球では須加宮 梅本房子さん、同 角井輝子と達野幸子さんペアでした。

(菅原園)
5月29日 長曽根寮では恒例ですが、イトーヨーカドー出張スパーを初めて楽しみました。
6月6日 県立医大看護学科学生20名が来園、交流しました。

(須加宮寮)
5月24日 21名が東映太秦映画村へ「お楽しみ外出」をしました。

(長曽根寮)
5月29日 セラピー犬の「大地」がこの日、1歳のお誕生日を迎えました。

(八重垣園)
5月24日 俳句クラブ。「眼に青葉ひとときわ沁み入る雨あがしたが、インターネットによってそのお心を継いで行く事に

り」「白い傘若葉を映し坂を行く」「生まれるる曾孫待つ日々松の花」

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
7月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四五二回祝会
7月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)
7月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。
* 月次祭(大本宮)
7月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 紫陽花邑大掃除
7月30日(日) 午前9時より大倭大本宮境内の清掃行事として行います。
なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。
(雨天でできない場合の予定日は8月6日午前中とします)